

「ヴィクセル・コネクション」という問いの持つ 理論史的な意義について

吉田 雅 明

理論群としての「ヴィクセル・コネクション」の正確な定義とは？

専修大学の吉田と申します。私は第9章を中心に五つほどコメントさせていただきます。

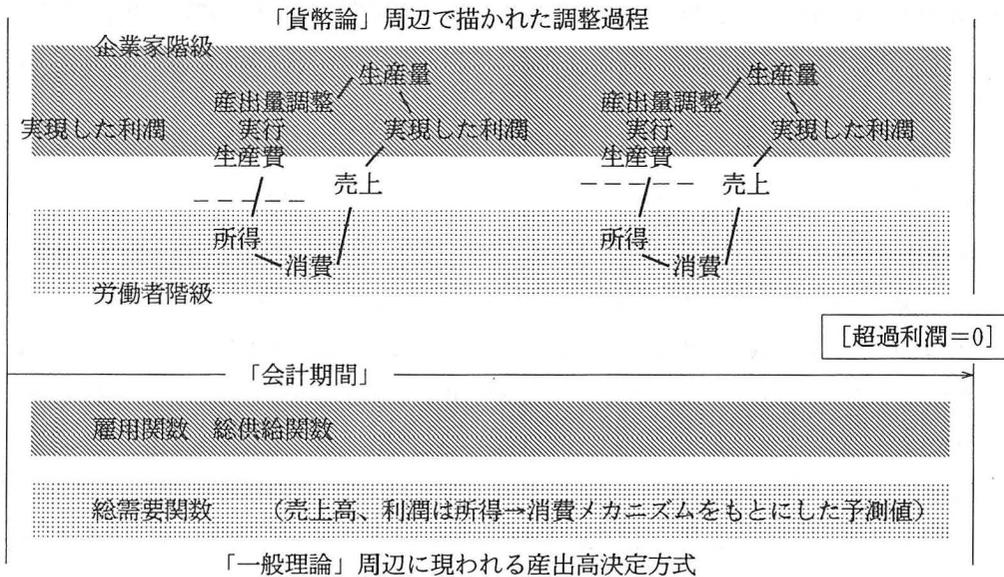
まず9章に関してです。平井先生のレジュメに「問題にしているのは経済理論」とありますが、一つのSRPとして、現在の経済学における理論的な意義を強調するものとして、ヴィクセル・コネクションを考える、という主旨だと思うのですが、そうだとするとどうもわかりにくい点があります。といいますのは、理論群としての「ヴィクセル・コネクション」の定義が明確ではないと思うからです。明示的・積極的な形のこの理論群の定義がなく、この理論群の性質を列挙する形での説明しかなく、おそらく{貨幣数量説に対して意識的な批判の言辞がみられ、かつ、二分法に対して意識的な批判の言辞がみられ、かつ、何らかの「貨幣経済理論」の展開がみられる}ということでヴィクセル・コネクションに含まれると思うのですが、これでは理論としての具体像があまりにも希薄な気がするのです。これならば、ポスト・ケインジアンの一部も含まれることになってしまいます。そうした理論構造プラス有効需要の原理、これがケインズ革命だというのでしょうか、これではケインズ経済学の理論像——それは現在の経済学においては意見の一致は見られていないわけですが——はさっぱり見えてこないのではないのでしょうか。

また、これに「20世紀はじめの北歐・オーストリー・ケンブリッジ学派に含まれるものであること」という(理論的ではない)条件をつけ加えると、言及されている経済学者と一致するようになるのでしょうか、それでもなお、提示される理論像が希薄なことに変わりはないと思うのです。たとえばヴィクセルの「自然利子率」の背景には実物体系が控えているのに対し、同じコトバを用いながらもケインズの「自然利子率」には企業家が産出調整しようと思わないような銀行の貸出利率以上は含意されていないわけで、このように共有する構造が脆弱であるにも拘わらず、なおヴィクセル・コネクションという問題設定が現代理論に対して積極的に持ちうるメッセージとは何なのか、読ませていただいた限りでは判然としないのです。

『貨幣論』と『一般理論』における財市場の分析の論理的関係について

『貨幣論』と『一般理論』には財市場の分析に関して断絶があるとおっしゃるのですが、私

「貨幣論」と「一般理論」の産出調整モデルの対応



などには、この図で示されているように、「TM供給関数」と所得と消費額を何らかの形でリンクする家計の行動様式があれば、有効需要の原理のメッセージは何等矛盾することなく導くことができるように見えるのですが、この点どのお考えでしょうか。以上はケインズの経済学をどう考えるかにもよるとは思いますが、よろしくお願いたします。

一般不均衡理論との「知的緊張」の内容とは？

第9章の後ろの方で、根岸先生も理論的貢献を行なわれている一般不均衡理論に言及しておられるのですが、ヴィクセル・コネクションと縁の深いレイオンフーウッドの主張に反して、こうした議論は「発生的」視点からは根拠づけることはできそうにはあまり思えないのですがいかがでしょう。発生的視点から行ってきた平井先生の形成史研究とクラウアー以降の理論展開は、発生的にかみ合うところは少ないように思えますし、また理論的にも上のコメントで申しましたようにどうかみ合うのかは判然としません。かみ合うところがなければ「緊張」も生じないわけで、そこでのレトリック以上の意味での「知的緊張」とは何か、具体的内容についてもう少し教えていただければと存じます。

経済学史研究におけるハード・コアの闘いとは？

最後に序章についてです。従来の学説史研究は、過去にこだわる歴史研究だったとおっしゃっていたと思いますが、E. H. カーの『歴史とは何か』にいうように、すべての歴史は現代史で

あり、この時代をどういうふうに捉えるかということが研究の根本においては問われていると思うのです。すなわち、歴史研究においてもハード・コアの闘いが行われているのではないのでしょうか。理論史というスタイルの新しさに目が向けられていると、こうした学説史研究のあり方は忘れられやすいと思いますが、このあたりはいかがでしょうか。

「泳いでいる人」の学説史研究の「科学」性を支えるものは何か

最後にもう一つ、ポパーに始まりラカトシュやファイヤアーベントの科学革命論は「科学」の要件を満たしているとお考えでしょうか。どうも「科学」としての根拠はないように思えるものです。じゃあ依拠するところはないのかということになりますが、そうではなくて、価値自由のことに触れられていたが、価値自由の要請というのは特定の価値観を排除せよということではなくて、研究する上でも何らかの価値観に立たずしては研究はなされ得ないのであり、自ら依拠する認識のフレームワーク——これは反証不能な部分ですが——について絶えず問いかけを行うべし、という認識論的反省の運動論として理解すべきだと考えるのです。要するに、ここで必要なのは、科学の類型学ではなくて運動論ではないだろうかということです。塩沢先生のコメントに、本書の正統・異端の分類や科学の類型論は河岸からみた学説史のようで泳いでいる人の学説史としての骨太さが欠ける、という指摘がありました。その点にも関係するかと存じますので、そのあたりのお考えを聴かせていただければと存じます。以上です。